

Title	自己呈示に伴う否定的意識の規定因の探索的検討
Author(s)	成田, 恭代; 松井, 豊
Citation	対人社会心理学研究. 2009, 9, p. 33-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6652
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自己呈示に伴う否定的意識の規定因の探索的検討¹⁾

成田恭代(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

松井 豊(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

本研究は、否定的意識を伴う自己呈示に注目し、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を探索的に検討した。大学生・大学院生 358 名(男性 119 名、女性 237 名、不明 2 名)を有効回答者とした質問紙調査を行い、日常生活における否定的意識を伴う自己呈示の経験の想起を求め、呈示者の内的過程の 3 段階(自己呈示の動機・理由、自己呈示に対する認知、自己呈示に伴う否定的意識)とパーソナリティ特性(賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、セルフ・モニタリング)の回答を求めた。その結果、拒否回避欲求およびセルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力は、否定的意識を伴う自己呈示の男女共通の背景要因であることが示唆された。また自己呈示に伴う否定的意識の規定因については、女性においては自己呈示に対する認知が否定的意識を規定し、男性においてはパーソナリティ特性や自己呈示の動機・理由が、自己呈示に対する認知を経ずに否定的意識を直接規定していた。

キーワード: 自己呈示、否定的意識、認知、拒否回避欲求、セルフ・モニタリング

問題

人は多面的な自己像をもっており、時と場合に応じて相手に見せる自分の側面を意識的あるいは無意識的に選択し、社会生活を営んでいる。例えば、親しい友人などに対しては普段どおりの自己のありのままの姿を見せ、あまり親しくない人や目上の人などに対しては、普段とは違うややかしこまった振る舞いをする。また、時には普段は人には見せない自分の内面を見せてしまうこともある。このような行動を、自己呈示(self-presentation)と呼ぶ。

自己呈示の定義については、研究者間で議論が分かれている。Leary & Kowalski(1990)は、自己呈示を印象操作(impression management)と互換可能なものと捉え、「他者に与える印象を統制しようと試みる過程」として定義している。一方、安藤(1994)は、自己呈示をより広義の概念として捉え、「自己の様々な側面を選択的に見せたり見せなかつたりすること」として定義している。これらの立場の異なる複数の定義の共通点として、自己呈示の際に呈示される自己の側面には、自分の普段のありのままの姿と普段の自分とはやや異なる姿の両方が含まれるということが挙げられる。したがって本研究では、自己呈示を「自分の普段のありのままの姿や普段の自分とはやや異なる姿などを含めた、自己の様々な側面を選択的に見せたり、見せなかつたりすること」と定義し、検討を行う。

自己呈示は日常の中で常に行われる対人行動であり、円滑な社会生活を送る上で必要不可欠な行動である。しかし、自分を良く見せるために見栄を張ったような振る舞いをして自己嫌悪を感じたり、その場の雰囲気や相手との関係を維持するために、自分らしくない無理な振る舞いをして気疲れてしまうなど、自己呈示に伴って呈示者が否定的意識を経験する可能性がある。このような自

己呈示に伴う否定的意識が頻発すると、適切な自己呈示ができなくなり、呈示者の適応や対人関係が悪化する可能性がある。そのため、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を明らかにすることで、上記のような呈示者の適応や対人関係への悪影響を防ぐことができると考えられる。したがって本研究では、否定的意識を伴う自己呈示をとりあげ、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を探索的に検討する。

自己呈示が呈示者の内的状態に与える影響

自己呈示に伴って呈示者が否定的意識を経験することはいくつかの研究で確認されている。例えば、Schlenker & Leary(1982)の対人不安の自己呈示モデルによれば、自己呈示に対する動機づけが高く、自己呈示による印象操作の成功確率が低く見積もられているほど、呈示者は強い対人不安感情を感じると理論化されている。また、水野(1994)の実験では、自分の意に反した自己呈示の後に、不快感や憂うつが生じていた。これらの研究では、主に、実験設定による教示の下で、いわば強制的に行わされた自己呈示について検討している。

しかし、実際の日常生活のなかでは、呈示者が強制下で自己呈示を行うことは稀であり、社会的文脈に応じて自らの判断で自己呈示を行う場合が一般的であると考えられる。また、相手とのその後の関係継続可能性が少ない実験場面における自己呈示は、その後の相手との関係継続可能性のある日常生活における自己呈示とは質的に異なっている可能性がある。酒井(1996)は、自己呈示に対する呈示者の反応を正しく捉えるためには、呈示者自身の生活における実体験についてたずねることが望ましいと指摘している。しかし、Leary, Nezlek, Downs, Radford-Davenport, Martin, & McMullen(1994)は、日常生活における自己呈示について検討した実証研究

は少ないと指摘している。

そこで、呈示者が自身の日常生活で自らの判断で自己呈示を行った場合の、呈示者の否定的意識について検討する必要がある。日常生活における研究知見が乏しい現状(Leary et al., 1994)を踏まえ、本研究では、否定的意識を伴う自己呈示を検討するにあたっては、まず半構造化面接による探索的検討を行い、続いて質問紙調査による量的な検討を行う。

否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階

本研究では否定的意識を伴う自己呈示を検討するにあたり、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程を、自己呈示の動機・理由、自己呈示に対する認知、自己呈示に伴う否定的意識の3段階に分けて捉える。

Leary(1983)によれば、自己呈示時には、呈示者のもつ何らかの基準と現在の状況や結果とを比較する一種の基準照合過程が進行している。その過程においては自己呈示による目標達成の成否を自己査定する呈示者の内的過程が含まれる。菅原(1998, 2004)は、この基準照合の視点から、自己呈示時の呈示者の内的過程を理論化している。

菅原(2004)は、Carver & Scheier(1981)の自己制御理論に基づいて、個人が他者の目を意識している状態を模式的に表している。この模式図では、呈示者は何らかの対人的目標や他者の様子を踏まえて、自己呈示戦略を策定するとされる。さらに呈示者は、策定した戦略に基づいて自己呈示を行い、呈示した自分の姿が適切であったか、他者の反応はどうかなどを評価して、必要に応じて自分の行動を調整したり自己呈示戦略を修正したりする。また菅原(1998)は、羞恥の発生のメカニズムを自己呈示と関連づけてモデル化している。このモデルでは、呈示者は状況や相手によって呈示すべき適切な自己像を決定し、呈示すべき自己像と実際の自己呈示とを照合して、両者の間に矛盾がないかどうかを認知するとされる。そして、その照合の結果、両者の間に矛盾があった場合に、羞恥という否定的意識が発生すると論じている。菅原(1998)は、このような自己呈示に対する認知と、その結果として生じる羞恥という否定的意識は、対人関係維持のために個人の行動に制約と方向づけを与える自己監視機能を担っていると理論化している。

菅原(1998, 2004)の理論に基づけば、自己呈示時の呈示者の内的過程には、次の3つの段階があると考えられる。第1の段階は、その場の状況や相手の様子を踏まえてどのような自己呈示をするかなどの目標、すなわち自己呈示の動機・理由が発生する段階である。第2の段階は、その動機・理由に基づいて実行した自己呈示が適切であったかを認知的に評価する、自己呈示に対する

認知の段階である。第3の段階は、自己呈示に対する認知的評価の結果、自分の自己呈示が適切でなかった場合に、羞恥をはじめとする否定的意識が生じる段階である。

したがって本研究では、自己呈示時の呈示者の内的過程が、①自己呈示の動機・理由、②自己呈示に対する認知、③自己呈示に伴う否定的意識の生起の3段階から成ると仮定する。以下では、自己呈示に伴う否定的意識と、自己呈示の動機・理由および自己呈示に対する認知との関連の観点から、先行研究を整理する。

自己呈示の動機・理由 本研究では、自己呈示について「自分の普段のありのままの姿や普段の自分とはやや異なる姿などを含めた、自己の様々な側面を相手に選択的に見せたり、見せなかったりすること」という動機的な要素を含まない定義を与えているが、自己呈示の動機・理由については、以下のような議論がされている。

多くの研究者が自己呈示を印象操作と互換可能な用語であるとしているように(Leary & Kowalski, 1990)、自己呈示は主として相手に与える印象を操作・統制し、社会的な勢力を獲得するための行動として捉えられてきた。そのため従来の自己呈示研究においては、自己呈示の動機は相手に特定の印象(特に、良い印象)を与えたいという利己的な印象操作動機として扱われることが多かった。例えば、Leary et al.(1994)は、自己呈示の動機として「取り入り」、「自己宣伝」、「示範」、「外見的魅力」の4側面を仮定している。また、谷口・大坊(2005)は、相手に与えたい印象を自己呈示の動機と捉え、「外見的魅力」、「有能さ」、「社会的望ましさ」、「個人的親しみやすさ」の4つの自己呈示の動機を抽出している。また、これらの印象操作動機に基づく自己呈示に伴って、否定的意識が生じることが示唆されている。例えば酒井(1996)は、自分の「見栄を張った自己呈示」という否定的な自己高揚の呈示に伴って自己嫌悪や自己批判などの否定的意識が生じることを示している。

しかし日常生活の中では、相手との関係維持や周囲への配慮といった利他的あるいは互恵的な要素を含み、直接的には印象操作に結び付かない自己呈示の動機、すなわち「非印象操作動機」に基づいて自己呈示をすることもある。例えば、森田・古川(2007)は「他者配慮」型自己呈示を検討しているが、この「他者配慮」型自己呈示の背景には、相手との互恵的な関係維持動機があると推定される。また、佐久間・無藤(2003)は、自己呈示の関連領域である可変的自己について検討し、関係に応じて自己が変化する動機として、「演技隠蔽」という印象操作的な動機以外に、「関係維持」や「自然・無意識」、「関係の質」という、直接的には印象操作に結び付かない非印象操作動機を見出している。対人ストレスイベントについて研

究した橋本(1997)では、対人ストレスイベントの1つとして、「上下関係に気を遣った」や「無理に相手に合わせた会話をした」などの、対人関係を円滑に進めようとする中で気疲れや違和感などのストレスが生じる「対人摩擦」を見出している。この対人摩擦では、相手や周囲への配慮などの非印象操作動機に基づく自己呈示をしていることが示唆される。このように、日常生活における自己呈示においては、印象操作動機以外に、非印象操作動機も働いていると考えられる²⁾。また、このような非印象操作動機に基づく自己呈示は円滑な対人関係を支える機能を担っていると考えられるが、そのような自己呈示に伴って否定的意識が生じることで、適切な自己呈示が困難になり、対人関係が悪化する可能性がある。したがって、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を検討するにあたり、非印象操作動機に注目することで、円滑な対人関係を支える自己呈示を阻害する要因を明らかにすることができると期待される。

以上より本研究では、自己呈示の動機・理由について、相手に良い印象を与えたいなどの印象操作動機と、相手や周囲への配慮などの非印象操作動機の2側面を想定し、自己呈示に伴う否定的意識との関連を検討する。

自己呈示に対する認知 自己呈示に伴う否定的意識に関わる自己呈示に対する認知は、2種類に大別できる。

第1は、自分が相手に呈示しようと考えている姿を、当該の自己呈示状況における目標通りに適切に呈示できているか、すなわち、自己呈示の目標達成に関する認知である。Albright, Forest, & Reisetter(2001)は、印象操作の成果に関する呈示者の認知について検討している。同研究は、自己呈示による印象操作の成果に関する認知は、比較的正確であることを示している。

第2は、「こうすべきあるいは「こうしてはならない」という自分の考えから生じる自分の姿(以下、本研究では当為自己像と呼ぶ)や、普段のありのままの自分の姿(以下、本研究では現実自己像と呼ぶ)と自身の自己呈示との間に矛盾がないかを照合する認知である。佐久間(2001)は、関係による自己の変化の捉え方を示す変化意識を検討し、関係による自己の変化は「自然、当然である」といった肯定的な変化意識と、「自分がわからなくなるようで怖い」、「演じているようで嫌だ」といった否定的な変化意識とがあることを示している。また、佐久間・無藤(2003)によれば、否定的な変化意識をもつ人ほど、自尊感情が低く自分に否定的な感情を抱いていた。したがって、関係に応じて自己呈示を変化させるべきではないという当為自己像をもっている場合は、状況ごとに一貫しない自己呈示をすることが当為自己像と矛盾するため、否定的意識が生じると考えられる。さらに酒井(1996)で

は、否定的な自己高揚的呈示に対する自己嫌悪や自己批判などの否定的意識の中に、「自分は無理をしている」や「自分がかっこうをつけている」などの項目が含まれていた。酒井(1996)のこれらの項目から、自己呈示と現実自己像とを照合し矛盾を認知した結果、否定的意識が生じていると推察される。

これらの自己呈示に対する2種類の認知と自己呈示に伴う否定的意識との間には、次のような関連が予測される。すなわち、呈示者は自己呈示時に、実際に行った自己呈示と、当該の自己呈示状況における目標、あるいは当為自己像や現実自己像とを照合して、自身の自己呈示を認知的に評価する。その結果、自分の自己呈示の目標に合致した自己呈示ができていれば、あるいは自己呈示と当為自己像や現実自己像との間に矛盾がなければ、否定的意識は発生しないと予想される。逆に、自分の自己呈示を否定的に認知してしまった場合には否定的意識が生じるものと予測される。

しかし、Albright et al.(2001)では、自己呈示と自己呈示に対する認知との関連の検討が不十分であることも指摘されている。そこで本研究では、自己呈示に対する認知について、目標達成に関する認知と当為自己像や現実自己像との矛盾に関する認知の2つに分けて、自己呈示に伴う否定的意識との関連を検討する。

否定的意識を伴う自己呈示に関連するパーソナリティ特性と否定的意識を伴う自己呈示の性差

否定的意識を伴う自己呈示に関連するパーソナリティ特性として、本研究では賞賛獲得欲求・拒否回避欲求やセルフ・モニタリングを取り上げて検討を行う。また、否定的意識を伴う自己呈示については、男女による違いが予想されるため、本研究では男女別に検討を行う。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求 賞賛獲得欲求とは他者からの肯定的な評価を獲得しようという欲求であり、拒否回避欲求とは否定的な評価を避けようとする欲求である(菅原, 1986)。これらの両欲求は、自己呈示に異なる方向づけをすることが示されている。例えば、賞賛獲得欲求は自己顕示的自己イメージと、拒否回避欲求は「善良な市民」イメージとそれぞれ結びついている(菅原, 1986)。また、賞賛獲得欲求は主張的な行動を促進し、拒否回避欲求は主張的な行動を抑制する(三田村・横田, 2006)。

これらの知見から、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求は、自己呈示の動機・理由に影響を与えていると考えられる。賞賛獲得欲求の高い呈示者は自分を良く見せようという動機・理由を抱き、自分の良さを積極的にアピールするような自己呈示をしやすいと考えられる。また、拒否回避欲求の高い呈示者は相手に悪印象を与えないよう消極的な自己呈示をしやすいため、自分の考え等を主張できずに、その場や相手に合わせたような自己呈示をして

しまい、否定的意識を経験しやすいと推察される。そこで、本研究では否定的意識を伴う自己呈示を検討するにあたり、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求を取り上げて検討を行う。

セルフ・モニタリング セルフ・モニタリングとは、対人場面において他者の行動や周囲の状況を観察し、自らの自己呈示がその場に適切か否かを考慮して、自己の行動を統制する傾向である(Snyder, 1974)。セルフ・モニタリングは、自己呈示に関連するパーソナリティ特性として注目されている(安藤, 1994)。例えば、セルフ・モニタリングの高い男性は、周囲にサクラのいる場合に屈從的な同調行動を取りやすい(水野・橋本, 1992)。また、セルフ・モニタリングの下位側面の1つである「自己呈示の修正能力」が高いほど、感情労働場面において、自分の本来の感情と呈示している感情との矛盾に伴う否定的な意識を経験しやすい(須賀・庄司, 2007)。

これらの知見から、セルフ・モニタリングは、自己呈示に対する認知と関連していると考えられる。セルフ・モニタリングの高い自己呈示者は、周囲の状況や相手の様子を常に観察し、その場その場で自己呈示を変化させることができるため、現実自己像や当為自己像と矛盾した自己呈示をしやすく、否定的意識を経験しやすい可能性がある。そこで本研究では、否定的意識を伴う自己呈示の関連要因として、セルフ・モニタリングを取り上げる。

否定的意識を伴う自己呈示の性差 否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階や、否定的意識を伴う自己呈示に関連するパーソナリティ特性には、性差が予想される。

まず否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階のうち、自己呈示の動機・理由について以下のような性差が予想される。堀田・無藤(2001)によれば、女性は男性に比べて相手との関係維持願望が高い。佐久間・無藤(2003)では、関係に応じた自己の変化に関する4つの自己変化動機のうち「関係維持」、「自然・無意識」、「関係の質」の3側面で性差が見られ、いずれも女性のほうが男性に比べて高かった。これらの知見から、相手や周囲への配慮のためなどの非印象操作動機は、男性よりも女性において高い可能性がある。

また、否定的意識を伴う自己呈示に関連するパーソナリティ特性についても、以下のような性差が指摘されている。まず、拒否回避欲求は概して女性のほうが男性に比べて尺度得点が高いことが報告されている(菅原, 1986; 小島・太田・菅原, 2003)。また、セルフ・モニタリングの高い男性は、周囲にサクラのいる場合に屈從的な同調行動を取りやすいことが明らかにされている(水野・橋本, 1992)。

以上のように、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者

の内的過程の3段階や、否定的意識を伴う自己呈示に関連するパーソナリティ特性には性差があるため、自己呈示に伴う否定的意識の規定因も男女で異なっている可能性がある。したがって本研究では、自己呈示に伴う規定因について、男女別に検討を行う。

本研究の目的

本研究では否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程を3段階に分けて捉え、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を探索的に検討する。そのために本研究では、検討の前段階として半構造化面接による予備調査を行い、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階を探索的に検討する。さらに質問紙を用いた本調査によって、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階の因子構造を検討する。同時に本調査では、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階とパーソナリティ特性との関連を男女別に検討し、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を明らかにする。

方法

予備調査

日常生活における否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階を探索的に検討するために、半構造化面接による面接調査を行った。

方法 面接対象者は、大学生・大学院生7名(男性2名、女性5名)、平均年齢20.86($SD = 1.35$)歳であった。調査時期は2007年3月であった。予備調査では『『本当の自分』とは違う人柄であるかのように振る舞ったり、『本当の自分』とは違う考え方をしているようなふりをした』経験について想起するよう教示し、想起した経験における呈示者の意識内容について回答を求めた。なお予備調査では、否定的意識を伴う自己呈示を想起しやすいように、否定的意識を伴いやすいと考えられる「普段の自分とは異なる姿を呈示した経験」に限定した教示を行っているが、面接のなかでは「普段のありのままの自分の姿を呈示した経験」に関する回答も同時に収集した。

結果と考察 面接で得られた発言内容を、自己呈示に伴う否定的意識と、自己呈示の動機・理由という2つの観点に基づき、KJ法を援用して分類した。分類は、第1著者と第2著者とが独立に行った。

その結果、自己呈示に伴う否定的意識は「否定的感情」、「自己嫌悪」、「演じた自分に対する否定的意識」の3側面に分類された(Table 1)。また、自己呈示の動機・理由は、「自分を良く見せる」と「相手・周囲への配慮」の2側面に分類され(Table 2)、各側面にはTable 2に示す下位側面が含まれていた。さらに、回答内容から、否定的意識を伴う自己呈示時に呈示者が自分自身の自己呈

Table 1 予備調査における自己呈示に伴う否定的意識の分類結果と代表的な回答

側面・回答例
否定的感情(例: 辛い、しんどい)
自己嫌悪(例: 些細な嘘をついてしまう、器の小さい自分)
演じた自分に対する否定的意識 (例: 本心とは違うことができてしまう自分にへこんだ)

Table 2 予備調査における自己呈示の動機・理由の分類結果と代表的な回答

側面・回答例
自分を良く見せる 相手に与える印象の操作(例: かっこつけるため) 強がり・弱い自分の否定(例: 強い自分でありたい)
相手・周囲への配慮 その場の雰囲気維持(例: 場の空気をよどませたくない) 相手との関係維持(例: 相手との関係を悪くしたくない) 周囲への迷惑の回避(例: 周囲に迷惑をかけないように)

Table 3 予備調査における自己呈示に対する認知の分類結果と代表的な回答

側面・回答例
自己呈示の失敗 呈示目標の不達成(例: 笑いを取ろうと思って頑張った結果、上手く笑いがとれなくて、辛かった) 内面の非意図的呈示(例: 本当のことは知られたくない) 理想と異なる呈示(例: 自分は何を言っているんだろう)
自己矛盾 自分らしくない無理な呈示 (例: 無理やり明るく振る舞った反動で、尚更辛く) 非一貫的・不誠実な呈示(例: 八方美人)

示をどのように捉えていたかを推察し、自己呈示に対する認知を抽出した。その結果、自己呈示に対する認知について「自己呈示の失敗」と「自己矛盾」の2側面を抽出した(Table 3)。各側面には Table 3 に示す下位側面が含まれていた。

否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階については、これらの抽出された側面に基づいて調査項目が決定された。また、予備調査の面接対象者数が7名と少数であったため、本調査においても自由記述式設問による探索的な検討を行った。

回答者

茨城県内の国立大学および東京都内の私立大学の大学生・大学院生370名(男性127名、女性241名、不明2名)、平均年齢 20.01($SD = 1.60$)歳であった。全回答者370名のうち、明らかな虚偽回答を含むと判断された回答者や、調査項目の4分の1以上に回答していなかった回答者など、12名を分析対象から除外した。最終的な有効回答者は358名(男性119名、女性237名、不明2名)、平均年齢 20.05($SD = 1.60$)歳であった。

調査方法・調査時期

個別自記入方式の質問紙調査で行われた。調査は、筆者による個別配布個別回収形式と、大学の講義終了後の集合実施形式のいずれかで実施された。調査時期は、2007年6月～7月、および同年11月であった。

調査内容

「あなたが人に対して自分のある一面を見せたり、ある一面について話したりした時に、自分で自分に違和感を感じたり、釈然としない気持ちになったなど、何らかの嫌な思いをした…という経験についてお聞きます」という説明文に続いて、以下の質問への回答を求めた。

否定的意識を伴う自己呈示の経験 a. 経験の具体的な内容の自由記述: 当該経験の具体的な内容について自由記述で回答を求めた。この設問への回答をもって、当該現象を想起できたとみなした。なお、想起できなかった場合には、以降の否定的意識を伴う自己呈示に関する設問には回答せずに、後述のパーソナリティ特性への回答を求めた。b. 自己呈示に対する認知: 予備調査で得られた自己呈示に対する認知の2側面(「自己呈示の失敗」、「自己矛盾」)をもとに20項目を独自に作成した。5件法(「5. 非常にあてはまる」、「4. あてはまる」、「3. どちらでもない」、「2. あてはまらない」、「1. 全くあてはまらない」)で回答を求めた。c. 自己呈示に伴う否定的意識: 当該経験時の意識について自由記述による回答を求めた上で、28項目からなる尺度に回答を求めた。尺度は予備調査で得られた3側面(「否定的感情」、「自己嫌悪」、「演じた自分に対する否定的意識」)をもとに独自に作成した(5件法)。d. 自己呈示の動機・理由: 当該経験時の自己呈示の動機・理由について、自由記述による回答を求めた上で、17項目からなる尺度に回答を求めた。尺度は、予備調査で得られた2側面(「自分を良く見せる」、「相手・周囲への配慮」)をもとに独自に作成した(5件法)。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求 小島他(2003)の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度より、原論文に基づいて「賞賛獲得欲求」・「拒否回避欲求」上位6項目ずつを抜粋した(5件法)。

セルフ・モニタリング Lennox & Wolfe(1984)の改訂セルフ・モニタリング尺度日本語版(小口, 1995)である。「他者表出行動への敏感さ」と「自己呈示の修正能力」の2因子からなる13項目を用いた(5件法)。

以上のほかに、年齢と性別の回答を得た。また、上記の他に当該経験時の状況や、相手との関係性、否定的意識を伴う自己呈示の経験の頻度についても回答を求めたが、以降の分析には含めなかったため、記述を略す。また、否定的意識を伴う自己呈示に関する自由記述諸設問への回答についても、以降の分析には含めなかった。なお、本研究における解析は SPSS11.5J for

Windowsを用いて行った。

結果

現象の想起の確認

全有効回答者 358 名のうち、否定的意識を伴う自己呈示の経験を想起できた回答者は220名(男性62名、女性157名、不明1名)であり、現象想起率は61.5%であった。現象を想起できた回答者と想起できなかった回答者において、年齢の差の検定を行った。その結果、現象を想起できた回答者のほうが、想起できなかった回答者よりも有意に年齢が高かった($t = 2.48, p < .05$)。以下では、現象を想起できた回答者 220 名を分析対象とした。

否定的意識を伴う自己呈示時の内的過程の 3 段階の因子構造³⁾

自己呈示に伴う否定的意識 自己呈示に伴う否定的意識に関する28項目について、因子分析(主成分分解・バリマックス回転)を行った。その結果、固有値の推移(9.45、2.17、2.06、1.42)および解釈可能性から、3 因子を抽出した。さらに、いずれの因子にも.40 以上の負荷を示さない項目や複数の因子に高い負荷を示す 7 項目を除いた 21 項目について、再度因子分析を行った(Table 4)。そ

の結果各因子は、「自己嫌悪」、「演じた自分に対する拒絶感」、「辛さ・苦しさ」と解釈された。

自己呈示の動機・理由 自己呈示の動機・理由に関する17項目について、因子分析(主成分分解・バリマックス回転)を行った(Table 5)。その結果、固有値の推移(4.89、4.58、1.55)および解釈可能性から2 因子を抽出した。各因子は「自分を良く見せる」、「相手・周囲への配慮」と解釈された。

自己呈示に対する認知 自己呈示に対する認知に関する20項目について、因子分析(主成分分解・バリマックス回転)を行った。その結果、固有値の推移(4.56、3.52、2.14)および解釈可能性から、2 因子を抽出した。いずれの因子にも.40以上の負荷を示さない項目や複数の因子に高い負荷を示す3項目を除いた17項目について、再度因子分析を行った(Table 6)。その結果、各因子は「自己矛盾」、「自己呈示の失敗」と解釈された。

尺度得点の算出 因子ごとに尺度得点を算出した。尺度得点は、各因子に.40以上の高い負荷を示した項目を単純加算し、その値を各因子の項目数で除して算出した。また、信頼性係数を算出したところ、すべての尺度においておおむね十分な内的一貫性を確認した。

Table 4 自己呈示に伴う否定的意識の因子分析結果(主成分分解・バリマックス回転)

No. 項目	因子			h^2
	1	2	3	
第1因子: 自己嫌悪 $\alpha = .89$				
6 情けない気持ちになった	.82	.12	.21	.74
21 自分が情けない人間に感じられた	.79	.28	.15	.72
4 自分のことが嫌だと思った	.77	.10	.21	.65
8 自分のことを恥ずかしく思った	.76	.19	.07	.62
7 自分は器が小さい人間だと思った	.72	.12	.13	.54
1 自分の行動を後悔してしまった	.64	.19	.14	.47
第2因子: 演じた自分に対する拒絶感 $\alpha = .81$				
25 自分は嘘つきであると思った	.21	.71	-.07	.55
9 相手によって振る舞い方を変える自分を受け入れられないところがあった	.05	.67	.24	.50
17 自分がそのようなことをした動機は不純だったと思った	.29	.66	-.04	.53
19 本心とは異なる行動ができてしまう自分に落ち込んだ	.20	.60	.24	.46
15 もっと素直に本当のことを言える心の広さが欲しいと思った	.12	.60	.06	.38
18 自分の行動に違和感を感じた	.06	.58	.32	.45
11 こんなことをする自分は、本当の自分ではないと思った	.04	.57	.33	.43
第3因子: 辛さ・苦しさ $\alpha = .77$				
14 辛かった	.12	.00	.81	.66
5 葛藤を感じた	.27	.13	.61	.46
3 もやもやした気持ちだった	.39	.07	.56	.46
12 気疲れした	-.29	.18	.54	.41
26 いらだちを感じた	.23	.19	.48	.32
20 不安な気持ちだった	.20	.36	.47	.39
27 自分の行動をむなしいと思った	.39	.26	.44	.41
16 悔しかった	.37	.12	.44	.34
	負荷量の平方和	4.29	3.26	2.96
	寄与率(%)	20.41	15.52	14.08

Table 5 自己呈示の動機・理由の因子分析結果(主成分分解・バリマックス回転)

No. 項目	因子		h ²
	1	2	
第1因子: 自分を良く見せる $\alpha = .89$			
12 「できる奴」だと思われたかったから(印象操作)	.85	-.08	.72
16 自分の良さをアピールしたかったから(印象操作)	.84	.03	.71
3 周囲に自分のいいところを見せたかったから(印象操作)	.77	.18	.62
9 自分の器の小ささを認めたくなかったから(弱さ否定)	.74	-.06	.55
14 「自分はこんなことができるんだ」と自分に言い聞かせたかったから(弱さ否定)	.71	-.19	.54
7 相手にいい印象をあたえておきたかったから(印象操作)	.70	.39	.64
17 自分のダメなところから目をそらしたかったから(弱さ否定)	.69	-.12	.49
2 自分のできないところや弱いところを否定したかったから(弱さ否定)	.66	.00	.44
第2因子: 相手・周囲への配慮 $\alpha = .87$			
6 その場の空気を壊したくなかったから(雰囲気維持)	-.11	.82	.69
5 相手との関係を悪くしたくなかったから(関係維持)	.13	.80	.65
4 その場の雰囲気を悪くしたくなかったから(雰囲気維持)	-.27	.79	.69
8 相手に嫌な思いをさせたくなかったから(迷惑回避)	.10	.76	.58
15 相手と良好な関係を保ちたかったから(関係維持)	.28	.69	.55
13 その場が暗くなるのを避けたかったから(雰囲気維持)	-.18	.68	.50
11 相手を傷つけたくなかったから(迷惑回避)	-.02	.64	.40
10 今後も相手との付き合いを維持したかったから(関係維持)	.30	.55	.39
1 相手や周囲の人に迷惑をかけたくなかったから(迷惑回避)	-.14	.52	.29
	負荷量の平方和	4.81	4.66
	寄与率(%)	28.27	27.43

註: ()内は予備調査から予測された下位側面を示す。印象操作: 相手に与える印象の操作 弱さ否定: 強がり・弱い自分の否定 雰囲気維持: その場の雰囲気の維持 関係維持: 相手との関係の維持 迷惑回避: 周囲への迷惑の回避

Table 6 自己呈示に対する認知の因子分析結果(主成分分解・バリマックス回転)

No. 項目	因子		h ²
	1	2	
第1因子: 自己矛盾 $\alpha = .82$			
13 無理に頑張って、自分らしくない振舞いをしていた(無理)	.79	.01	.63
7 自分らしくない振舞いをし、無理をしていた(無理)	.75	.02	.56
1 普段の自分らしくなく、無理に自分を作っていた(無理)	.72	-.02	.53
6 相手によって見せる面を変えろという、自分の考え方に合わない行動をしていた(不誠実)	.63	.24	.45
11 その場その場で振舞い方を変えろという、自分の良心に反する行動をしていた(不誠実)	.62	.24	.45
10 いつもよりも背伸びをした振る舞いをしていた(無理)	.55	.00	.31
19 相手に応じて言うことや行動を変えろという、後ろめたいことをしていた(不誠実)	.55	.30	.39
4 普段の自分よりもずっと良い姿を相手に見せていた(無理)	.54	-.20	.33
第2因子: 自己呈示の失敗 $\alpha = .77$			
8 本当は隠しておきたい自分の一面まで、表に出していた(非意図的)	-.29	.66	.52
17 最初は話すつもりがなかったことまで、思いがけず話したり見せたりした(非意図的)	-.11	.65	.43
20 本当は言うつもりがなかった本音まで、口に出してしまった(非意図的)	-.30	.61	.47
12 自分の目標とする姿とは異なる一面を、相手に見せていた(異理想)	.01	.61	.37
18 自分の特定の一面をアピールしようとしたが、失敗した(不達成)	.18	.59	.38
9 相手に良い印象を与えようとしたが、思うようになかった(不達成)	.31	.55	.40
5 相手に特定の印象を抱いてもらおうとしたが、上手くいかなかった(不達成)	.23	.55	.35
2 理想の自分の姿とはかけ離れた一面を、相手に見せていた(異理想)	.10	.53	.29
16 わたしの目指す自分の姿とは矛盾する振る舞いをした(異理想)	.25	.53	.34
	負荷量の平方和	3.84	3.36
	寄与率(%)	22.59	19.74

註: ()内は予備調査から予測された下位側面を示す。無理: 自分らしくない無理な呈示 不誠実: 非一貫的・不誠実な呈示 非意図的: 内面の非意図的呈示 異理想: 理想と異なる呈示 不達成: 呈示目標の不達成

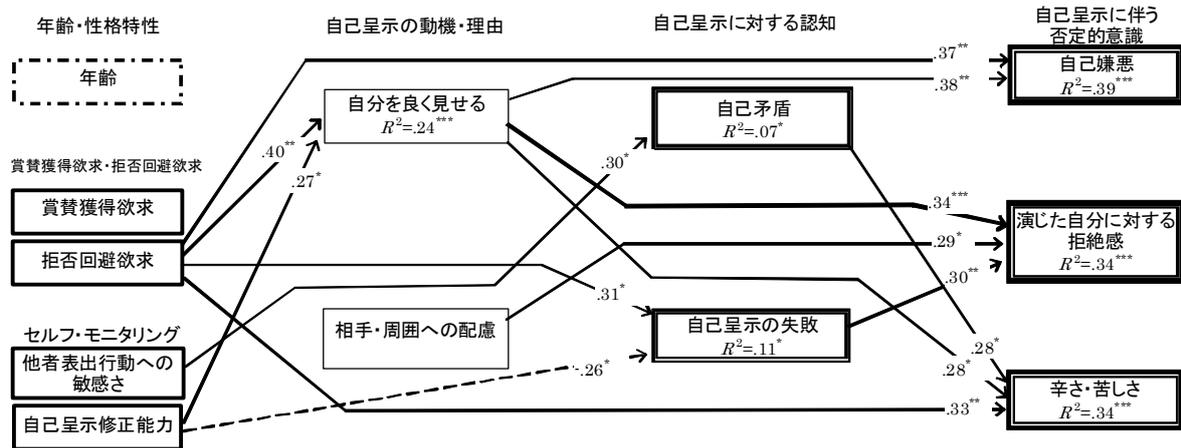
年齢、パーソナリティ特性および否定的意識を伴う自己呈示時の内的過程の3段階の尺度得点の性差

パーソナリティ特性に関する4尺度について、原論文に基づき信頼性係数を算出した(賞賛獲得欲求.84、拒否回避欲求.83、セルフ・モニタリング他者表出行動への敏感さ.82、セルフ・モニタリング自己呈示の修正能力.78)。その結果、おおむね十分な内的一貫性が確認された。

男女別に、年齢、パーソナリティ特性に関する4尺度、および否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階(自己呈示に伴う否定的意識、自己呈示の動機・理由、自己呈示に対する認知)の下位側面の尺度得点の平均値の差の検定を行った。その結果、拒否回避欲求 ($t = 1.99, p < .05$)および自己呈示の動機・理由の「相手・周囲への配慮」($t = 1.99, p < .05$)で有意差がみられ、いずれも女性のほうが男性よりも有意に高かった。その他の変数に、有意な差はみられなかった。

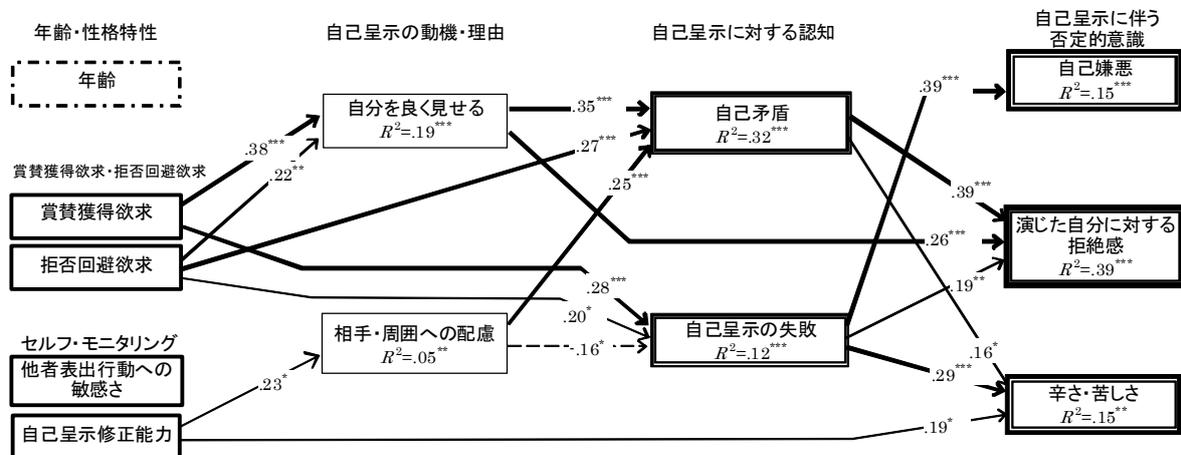
自己呈示に伴う否定的意識の規定因の検討

否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の3段階とパーソナリティ特性との関連を検討し、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を明らかにするために、男女別にパス解析を行った。パス解析では変数を4水準に分け、各水準より上位の変数を説明変数にとる重回帰分析を繰り返し行った。重回帰分析では変数増加法を用い、投入された変数の標準化偏回帰係数の有意性(5%水準)の基準で変数の投入を打ち切った。第1水準は、年齢およびパーソナリティ特性の4変数(賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、セルフ・モニタリング他者表出行動への敏感さ、セルフ・モニタリング自己呈示の修正能力)であった。第2水準は、自己呈示の動機・理由の2変数(自分を良く見せる、相手・周囲への配慮)であった。第3水準は、自己呈示に対する認知の2変数(自己矛盾、自己呈示の失敗)であった。第4水準は、自己呈示に伴う否定的意識の3変数(自己嫌悪、演じた自分に対する拒絶感、辛さ・苦しさ)であった。



註: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 数字は標準化偏回帰係数 β を示す。実線は正のパスを示す。破線は負のパスを示す。

Figure 1 男性における、自己呈示に伴う否定的意識を規定する要因に関するパス・ダイアグラム (n = 59)



註: *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 数字は標準化偏回帰係数 β を示す。実線は正のパスを示す。破線は負のパスを示す。

Figure 2 女性における、自己呈示に伴う否定的意識を規定する要因に関するパス・ダイアグラム (n = 153)

さ)であった。男性の結果を Figure 1 に、女性の結果を Figure 2 にそれぞれ示す。なおパス解析では、投入変数すべてに回答した 212 名(男性 59 名、女性 153 名)を解析対象とした。

考察

本研究では、否定的意識を伴う自己呈示に注目し、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階の因子構造を検討した。また、呈示者の内的過程の 3 段階とパーソナリティ特性との関連を検討し、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を明らかにした。

否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階の因子構造

因子分析の結果、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階について、動機・理由、認知、否定的意識のそれぞれの因子構造が明らかになった。自己呈示に伴う否定的意識については、「自己嫌悪」、「演じた自分に対する拒絶感」、「辛さ・苦しさ」の 3 側面が抽出され、予備調査から予測された因子構造が確認された。「自己嫌悪」は、自分は情けない、嫌だなどの自己嫌悪的な感情が自己呈示に伴って生じていたことを示している。また「自己嫌悪」の中には、「自分のことを恥ずかしく思った」という羞恥を示す項目が含まれており、自己呈示と羞恥とを結びつけた菅原(1998)のモデルと一部対応していた。また、「演じた自分に対する拒絶感」は、自己呈示をした自分が嘘つきで受け容れ難いという、特に偽る・演じるという一般に望ましくないとされる自己呈示をした自分を拒絶するような意識が生じていたことを示している。さらに「辛さ・苦しさ」は、自己呈示に際して辛さや葛藤、気疲れなどの漠然とした否定的な感情が生じていたことを示している。

自己呈示の動機・理由の因子構造については、「自分を良く見せる」と「相手・周囲への配慮」の 2 側面が抽出され、予備調査から予測された因子構造が確認された。これらの自己呈示の動機・理由の 2 側面のうち、「自分を良く見せる」は、自己呈示に際して相手に良い印象を与えたい、あるいは自分の欠点を否定したいという動機や理由を抱いていたことを示しており、先行研究で多く扱われてきた利己的な印象操作動機(e.g., Leary et al., 1994; 谷口・大坊, 2005)に当たると考えられる。また、「相手・周囲への配慮」は、自己呈示に際してその場の雰囲気や相手との関係を維持したり、周囲に迷惑をかけないようにという動機や理由を抱いていたことを示しており、佐久間・無藤(2003)の「関係維持」という動機に対応すると考えられる。したがって、「相手・周囲への配慮」という動機・理由は、先行研究(e.g., 森田・古川, 2007)で示唆されていた利他的あるいは互恵的な非印象操作動機の

1 つであると推察される。なお、パス解析の結果、「相手・周囲への配慮」は、男性では「演じた自分に対する拒絶感」を直接促進し、女性では後述する認知の「自己矛盾」を介して「演じた自分に対する拒絶感」と「辛さ・苦しさ」を促進していた。

自己呈示に対する認知の因子構造については、「自己矛盾」と「自己呈示の失敗」の 2 側面が抽出され、予備調査から予測された因子構造が確認された。これらの自己呈示に対する認知の 2 側面のうち、「自己矛盾」は当為自己像や現実自己像との矛盾に関する認知に対応すると考えられる。また「自己呈示の失敗」は、自己呈示によって、当該の自己呈示状況における目標を達成できなかったと認知していることを示しており、自己呈示の目標達成に関する認知であると考察される。

否定的意識を伴う自己呈示の規定因

男女別のパス解析結果に基づき、自己呈示に伴う否定的意識の規定因を、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階とパーソナリティ特性との関連と、自己呈示を伴う否定的意識の規定因とに分けて考察する。

パーソナリティ特性との関連 否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程とパーソナリティ特性との関連については、男女で共通点と相違点が見られた。

共通点については、男女いずれにおいても、拒否回避欲求およびセルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力と、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階との間に関連が見られた。

拒否回避欲求は、男女共通して、動機・理由の「自分を良く見せる」と認知の「自己呈示の失敗」を促進していた。加えて拒否回避欲求は、男性においては否定的意識の「自己嫌悪」と「辛さ・苦しさ」を促進し、女性においては認知の「自己矛盾」を促進していた。この結果から、拒否回避欲求は、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程に対して促進的な影響を与える、男女共通の背景要因であることが明らかになった。拒否回避欲求は「善良な市民」イメージと結びつき(菅原, 1986)、主張的な行動を抑制する(三田村・横田, 2006)ことが明らかになっているが、本研究の結果では「自分を良く見せる」という動機・理由と結びついていた。したがって、否定的意識を伴う自己呈示における「自分を良く見せる」という動機・理由には、相手に悪印象を与えないようにするという拒否回避的な側面が含まれていると推察される。

セルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力は、男性においては動機・理由の「自分を良く見せる」を促進する一方で、認知の「自己呈示の失敗」を抑制していた。女性においては動機・理由の「相手・周囲への配慮」と否定的意識の「辛さ・苦しさ」を促進する一方で、動機・理由の

「相手・周囲への配慮」を介して認知の「自己呈示の失敗」を抑制していた。したがって、セルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力は、一般的には自己呈示に伴う否定的意識に促進的な影響を与えながらも、「自己呈示の失敗」を抑制、すなわち自己呈示による目標達成を促進することによって、自己呈示に伴う否定的意識を一部抑制する効果をもっていた。したがって、セルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力は、男女共通に、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程に対して促進・抑制の両面的な影響を与えていることが明らかになった。

次に男女の相違点を見ると、女性においては、賞賛獲得欲求と否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階との関連が見られたが、男性においては関連が見られなかった。これは、賞賛獲得欲求と結びついた自己顕示的呈示(菅原, 1986)が、伝統的な女性役割と矛盾するためであると考えられる。また、男性においては、セルフ・モニタリングの他者表出行動への敏感さと否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階との間に、弱い関連が見られた。これは、セルフ・モニタリングの高い男性は屈從的な同調行動をしやすいという水野・橋本(1992)の知見と一致する。

自己呈示に伴う否定的意識の規定因 自己呈示に伴う否定的意識の規定因は、男女で相違点が見られた。

男性においては、自己呈示に対する認知と自己呈示に伴う否定的意識との関連が少なかった。また、「自分を良く見せる」などの自己呈示の動機・理由や、拒否回避欲求などのパーソナリティ特性は、多くの場合、自己呈示に対する認知を介さずに自己呈示に伴う否定的意識を直接規定していた。一方、女性においては、自己呈示に対する認知と自己呈示に伴う否定的意識との関連が強く、パーソナリティ特性や自己呈示の動機・理由は、多くの場合、自己呈示に対する認知を介して自己呈示に伴う否定的意識を規定していた。

以上より、自己呈示に伴う否定的意識の規定因は男女で異なっていた。すなわち、男性では、自己呈示に伴う否定的意識は自己呈示に対する認知には左右されず、女性においては、自己呈示に伴う否定的意識は自己呈示に対する認知を経て生じることが示唆された。したがって、女性においては、自己呈示に伴う否定的意識は、本研究において仮定した否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階(動機・理由、認知、否定的意識)にしたがって生じると考えられる。他方、男性においては、自己呈示に伴う否定的意識は、本研究で仮定した内的過程の 3 段階とは異なるプロセスで生じている可能性が示唆された。しかし、男性における自己呈示に伴う否定的意識の生起プロセスについては、本研究のデータからは確証的な議論ができないため、今後更に検討

する必要がある。

このような自己呈示に伴う否定的意識の規定因の男女の相違の原因については、以下のように推定される。

女性においては、自己呈示に対する認知と自己呈示に伴う否定的意識とが、対人関係を維持する上で重要な自己監視機能として合理的に結びついている可能性がある。菅原(1998)の議論に基づけば、本研究における自己呈示に対する認知は、対人関係を悪化させるような自己呈示を回避するための自己監視機能を担っており、また自己呈示に伴う否定的意識は、対人関係を悪化させるような自己呈示をしたことを示す警報であると位置付けられる。このような対人関係維持のための自己監視機能は、男性に比べて関係維持願望の強い女性(堀田・無藤, 2001)においては特に重要であると考えられる。したがって、女性においては、自己呈示に対する認知と自己呈示に伴う否定的意識との間に合理的な結びつきがあるため、自己呈示に対する認知が自己呈示に伴う否定的意識を規定していたと考えられる。

しかし、女性においてセルフ・モニタリングの他者表出行動への敏感さと否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階との間に関連がなく、この考察の妥当性について確認することができなかった。そのため、今後更に詳細な検討を行う必要がある。

以上より、本研究の結果から示唆された自己呈示に伴う否定的意識の規定因の男女による異同は、次のようにまとめられる。第 1 に、否定的意識を伴う自己呈示の男女共通の背景要因として、拒否回避欲求およびセルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力があった。また、男女いずれにおいても、拒否回避欲求は自己呈示に伴う否定的意識を促進し、セルフ・モニタリングの自己呈示の修正能力は自己呈示に伴う否定的意識に対して促進・抑制の両面的な影響を与えていた。第 2 に、自己呈示に伴う否定的意識の規定因は男女で相違が見られ、女性においては、自己呈示に対する否定的意識は自己呈示に対する認知を経て生じるのに対して、男性においては、自己呈示に伴う否定的意識は自己呈示に対する認知の影響を受けていなかった。

本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。第 1 に、本研究は一時点での質問紙調査による検討であるため、否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程の 3 段階の明確な因果関係については言及できない。第 2 に、本研究では、男性における自己呈示に伴う否定的意識の生起プロセスは明らかにされていない。第 3 に、本研究では、否定的意識を伴う自己呈示と呈示者の心理的・社会的適応との関連についても、検討されていない。今後は、これらの課題を踏まえて、更に検討を行う必要

がある。

引用文献

- Albright, L., Forest, C., & Reiser, K. (2001). Acting, behaving, and the selfless basis of metaperception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 910-921.
- 安藤清志 (1994). 見せる自分/見せない自分—自己呈示の社会心理学— セレクション社会心理学 1 サイエンス社
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1981). *Attention and self-regulation: a control-theory approach to human behavior*. New York: Springer-Verlag.
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 堀田仁美・無藤 隆 (2001). 青年期における見せかけの自己行動と友人関係の適応感および精神的健康との関連 お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要, 3, 79-91.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. Beverly Hills, CA: SAGE. (生和秀敏 (監訳) (1990). 対人不安 北大路書房)
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management : A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, 107, 34-47.
- Leary, M. R., Nezelek, J. B., Downs, D., Radford-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A. (1994). Self-presentation in everyday interactions: Effects of target familiarity and gender composition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 664-673.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984). Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1349-1364.
- 三田村 仰・横田正夫 (2006). アサーティブ行動阻害の要因について—対人恐怖心からの検討— パーソナリティ研究, 15, 55-57.
- 水野邦夫 (1994). 意に反した行動をした後の態度及び感情状態の変化 性格心理学研究, 2, 38-46.
- 水野邦夫・橋本 幸 (1992). 屈從的同調行動の規定要因としてのセルフ・モニタリングの検討 心理学研究, 63, 341-345.
- 森田朱音・古川久敬 (2007). 複数の対人関係における自己呈示—「他者配慮」型自己呈示の規定因に関する研究— 日本グループ・ダイナミクス学会第 54 回大会発表論文集, 74-75.
- 小口孝司 (1995). サービス業従事者のパーソナリティ 日本労働研究機構調査研究報告書, 62, 158-173.
- 酒井恵子 (1996). 自己高揚的呈示の否定的側面に対する反応の個人差 心理学研究, 67, 314-320.
- 佐久間路子 (2001). 大学生における関係的自己の可変性の理解—変化理由と変化意識に着目して— 人間文化

論叢, 4, 85-94.

- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, 51, 33-42.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- Snyder, M. (1974). Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 526-537.
- 須賀知美・庄司正実 (2007). 飲食店従業員の感情労働的行動とパーソナリティとの関連—セルフ・モニタリングおよび自己意識との関連— 目白大学心理学研究, 3, 77-84.
- 菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる 2 つの欲求について— 心理学研究, 57, 134-140.
- 菅原健介 (1998). 人はなぜ恥ずかしがるのか—羞恥と自己イメージの社会心理学— セレクション社会心理学 19 サイエンス社
- 菅原健介 (2004). 人はなぜ他人の目が気になるのか? 菅原健介 (編著) ひとの目に映る自己—「印象管理」の心理学入門— 金子書房 pp.1-23.
- 谷口淳一・大坊郁夫 (2005). 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究, 45, 13-24.

註

- 1) 本研究は、第1著者の卒業論文(平成19年度筑波大学第2学群人間学類)の一部に加筆・修正を行ったものである。調査実施にあたりご協力いただいた、筑波大学の新井保幸先生、佐藤有耕先生、岡田昌毅先生、大六一志先生、結城俊哉先生に、心より感謝致します。また、審査者や編集者の先生からいただいた貴重な審査コメントによって、研究を一層深めることができました。記して感謝申し上げます。なお本研究の一部は、日本社会心理学会第49回大会において報告された。
- 2) 印象操作動機を広義にとらえた場合、本研究における非印象操作動機も、「相手や周囲への配慮ができる」などの印象を与えているという意味で印象操作動機に含めることも可能である。しかし本研究では、印象操作動機を「相手に与える印象を操作・統制し社会的勢力の獲得する利己的な動機」という狭義の意味で捉え、相手や周囲への配慮などの「対人関係の円滑化を図ろうとする利他的・互恵的な動機」は、直接的には社会的勢力の獲得には結びつかない非印象操作動機として取り扱う。
- 3) 否定的意識を伴う自己呈示時の呈示者の内的過程に関する3尺度については、理論上、各下位側面に相関が仮定される。しかし本研究においては、パス解析の投入変数間の独立性を高めるために、バリマックス回転による因子分析を行うこととした。なお、補足的にプロマックス回転による因子分析を行ったところ、3尺度とも直交解とほぼ同様の因子構造が得られた。なお、各下位側面の因子間相関を見ると、否定的意識尺度については中程度の因子間相関(.37~.45)があったが、動機・理由尺度と認知尺度については因子間相関が低く(動機・理由.05、認知.11)、これらの各下位側面は相互に独立であると判断された。

The exploratory study regarding factors affecting negative feelings with self-presentation in daily life

Yasuyo NARITA (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*).
Yutaka MATSUI (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)

This study examined factors affecting negative feelings with self-presentation in daily life. In this study, self-presenter's internal process of self-presentation with negative feelings was assumed to be constructed by 3 steps (motivations for self-presentation, cognitions on self-presentation, and negative feelings with self-presentation). 358 undergraduates and graduates were asked to recall the event that he or she experienced negative feelings with self-presentation and to answer questions about 3 steps of self-presenter's internal process and personality traits (praise seeking, rejection avoidance, self-monitoring (including sensitivity to expressive behavior of others and ability to modify self-presentation)). As a result, it was revealed that rejection avoidance and ability to modify self-presentation of self-monitoring regulated self-presentation with negative feelings. Moreover, the results suggested sex differences of factors affecting negative feelings with self-presentation. In female, negative feelings with self-presentation were affected by cognitions on self-presentation. In male, on the other hand, negative feelings with self-presentation were directly affected by personality traits and motivations for self-presentation without being affected by cognitions on self-presentation.

Keywords: self-presentation, negative feelings, cognitions on self-presentation, rejection avoidance, self-monitoring.